天神祭奉納
2008 日本国際ドラゴンボート選手権大会
（第９回世界選手権最終代表選考会）

開　催　要　項

開催期日　平成 20 年 7 月 20 日（日）08：45～18：00　予定

※練習会：◆7 月 12 日（土）、13 日（日）
午前 11 時～午後 4 時、大阪北港ヨットハーバー
◆7 月 19 日（土）
午後 1 時～午後 4 時、桜宮・大川（源八橋上流）

※監督会議：7 月 19 日（土）午後 7 時

開催場所　大阪・八軒家浜前大川　天満橋～天神橋間 250㍍特設コース

種　　目

①オープン選手権	25 チーム
②女子選手権	5 チーム
③男女混合選手権	35 チーム
④シニア選手権	5 チーム
⑤ジュニア	5 チーム
募集合計	75 チーム　1,875 人

※本年度より中学生を対象としたジュニア部門を新設

スケジュール

午前 8 時 45 分	開会式予定
9 時 30 分～	レース開始
午後 5 時 30 分	レース終了
5 時 45 分～	表彰式
6 時 00 分	終了予定

《主　　催》　天神祭協賛会、日本ドラゴンボート協会、サンケイスポーツ、産経新聞社

《後　　援》　文部科学省（申請中）、大阪府、大阪府教育委員会、大阪市、大阪市教育委員会、笹川スポーツ財団 SSF スポーツ事業、関西河川スポーツ振興協会、水都大阪 2009 実行委員会、夕刊フジ、フジサンケイ ビジネスアイ、ラジオ大阪、ＦＭ802

《主　　管》　日本ドラゴンボート協会、大阪府ドラゴンボート協会

《特別協賛》　凸版印刷株式会社

《協　　賛》　ダイドードリンコ

《協　　力》　かまぼこの和田八、丸高渡船、広瀬産業海運、住之江競艇、京阪電気鉄道、奄美リゾートホテルカレッタほか

天神祭奉納
2008 日本国際ドラゴンボート選手権大会
開　催　趣　旨

日本三大祭のひとつ、大阪の天神祭に奉納する「2008 日本国際ドラゴンボート選手権大会」を 7 月 20 日（日）に大阪の大川（旧淀川）で開催します。本大会は辰年の 1988 年（昭和 63 年)、大阪天満宮ならびに天神祭渡御行事保存協賛会をはじめとする関係各団体の協力を得て、大阪・桜宮の大川（川崎橋～桜宮橋間 640 ㍍）をメーン会場に、国内初となる 22 人乗りのドラゴンボート国際大会として産声をあげました。以来、大会はことしで第 20 回の節目を迎えます。

大阪ではここ数年の環境への意識の高まりもあって、大阪府、大阪市はもとより、民間団体による水都再生への取り組みも活発化しています。ことし 3 月には舟運事業の新たな拠点となる大型桟橋・八軒家浜港が、京阪電鉄・天満橋駅前に開港しました。これを機に本大会は会場を従来の桜宮から大川下流の天満橋に移し、天満橋から天神橋間の 250 ㍍特設コースでとり行います。

ドラゴンボート（龍舟）競漕の発祥は、古代中国の春秋戦国時代にまで遡り、2300 年の長い歴史をもっていますが、昨今はアジアを中心に欧米、豪州、アフリカとドラゴンボート愛好家が広がっています。すでに 50 近い国と地域で国際大会が行われており、特に東アジア地域では、2005 年にマカオで開催された「東アジア競技大会」で正式種目として採用されたのを皮切りに、本年 10 月にバリで開催される「第 1 回アジア・ビーチゲームズ」、2010 年の「広州アジア大会」でも正式競技として採用されることが決まるなど、世界的な人気の高まりを見せています。

「日本国際ドラゴンボート選手権」は国内最大規模の大会で、全国各地から例年 60 チームにおよぶチームが参加。ドラゴンボート日本一を決める大会として位置づけられています。また、本場・香港など海外からもチームが参加。昨年は日本とタイ国修好 120 周年を記念して「THAILAND TEAM」が来日。オープンの部でみごと優勝を飾りました。今年の大会は、2009 年にポーランド・ポズナニで開催予定の第 9 回世界選手権の日本代表最終選考会を兼ねて開催します。

なお、大会では天神祭美化運動に関連しクリーン・リバー・キャンペーンを行うほか、カンボジアの対人地雷被災者救済支援にも協力。女子マラソンの五輪メダリスト、有森裕子氏が代表を務めるスポーツ NPO 法人「ハート・オブ・ゴールド」を通じて浄財を現地に贈ります。つきましては関係各位のご協力をお願いいたします。

大会テーマ

☆クリーン・リバー・キャンペーン

大阪天満宮が平成 4 年から進めている「ゴミのない天神祭」に協力して、大会事務局でもドラゴンボート・レースの会場となる桜之宮公園周辺と、会場で参加選手や見物の市民らにゴミ追放を呼びかけてきました。今回も、選手や大会のスタッフが一体となって、新会場・南天満公園周辺の清掃を行います。

また７月は「河川愛護月間」でもあり、大阪府土木部などが積極的に「川を大切にして下さい」とＰＲしております。この大会でも、こうした呼びかけを積極的にお手伝いします。

☆カンボジア対人地雷被災者救援支援

世界遺産アンコールワットで知られるカンボジアは、現在も内戦の後遺症といえる対人地雷の被害があとを断たず、特に子供ら弱者に集中しているのが現状です。大会ではこうした人達の義肢をつくるための支援を求めていきます。大会の参加料の一部は、女子マラソン五輪メダリスト有森裕子氏らが推進しているスポーツ NPO「ハート・オブ・ゴールド」を通じて、カンボジアへ贈ります。

☆水都再生への取り組み

天神祭渡御行事保存協賛会（野村明雄会長）、日本ドラゴンボート協会（小野清子会長）とともに大会を主催するサンケイスポーツは、NPO 大阪水上安全協会に加盟し、「日本国際ドラゴンボート選手権」を開催する大川周辺の美化に務めると同時に天神祭の奉納催事として水辺に賑わいをもたらす一役を担っております。また、今年の大会では、中学生を対象にしたジュニア部門を新設。大阪が官民一体となって取り組む水都再生事業の象徴ともいえる、八軒家浜前水域を会場に大会を開催することによって、参加選手、関係者のみならず、より多くの一般市民の方々に大会を楽しんでいただき、川への関心を高めていきたいと考えます。

第９回ドラゴンボート世界選手権大会

古く中国で生まれ、東アジア各地の伝統行事として広く親しまれてきた龍舟競漕がスポーツとして発展するきっかけとなったのは、1976 年に香港で開催されたドラゴンボートの国際大会。これを機にヨーロッパをはじめアメリカ、オーストラリアなどで次々と国際大会が行われるようになった。

世界選手権大会は、1991 年の国際ドラゴンボート連盟（IDBF）設立を受けて 1995 年 6 月に中国・岳陽市で 14 カ国が参加して第 1 回大会が開催された。以降 2 年に 1 度、英ノッティンガム、米フィラデルフィア、中国・上海、ドイツ・ベルリンなどで開催され、前回 2007 年はオーストラリア・シドニーで開催された。次回 2009 年はポーランド・ポズナニ、2011 年は米フロリダ州タンパベイでの開催が決定している。

本年の「日本国際ドラゴンボート選手権大会」は、来年 8 月にポーランドで開催される IDBF 第 9 回世界選手権の最終代表選考会を兼ねて行う。同世界選手権に出場する日本代表は東京大会での第 1 次選考会（5 月 25 日）、相生大会での第 2 次選考会（7 月 13 日）を経た、最も優秀なチームが選考される。

ドラゴンボートの起源

いまから 2300 年前の中国春秋戦国時代、楚の国を追放された詩人で政治家の屈原が、長江の泪羅江（べきらこう）で石を抱いて入水自殺した。民に親しまれていた屈原の行為に、農漁民は悲しみ、争うようにして舟を繰り出し、遺体が魚に食われないように銅鑼を鳴らし、ちまきを投げ込むなどして三日三晩、屈原の姿を捜し求めたという。以来、この屈原の命日に当たる旧暦の 5 月 5 日には、舟を出して競漕する行事が長江周辺で定着し、龍舟のルーツとなった。いまや水上での団体スポーツとして多くの愛好家をもつドラゴンボートだが、世界各地で行われる大会ではアジアの文化的、また歴史的な伝統を重視。競技を開始する前には必ず、船首に取り付けられた龍の目に朱を入れる「入魂式」が行われる。また、天神祭の奉納行事として催される「日本国際ドラゴンボート選手権」では、水上での安全を祈願し、大阪天満宮神職によるお祓いも同時に執り行われる。

競技としてのドラゴンボート

中国の伝統行事であった龍舟が東南アジア各地へ広がり、中国や台湾、香港などで龍舟を体験した欧米人が、それぞれの国に持ちかえって楽しみ始めたことで、ドラゴンボートは急速に世界に広がった。1976 年、香港ではじめて国際的な競技としての大会「香港国際龍舟祭」が開かれ、龍舟ブームに火が付いた。

水上スポーツとしてのドラゴンボート人気が高まるにつれ、競技を統括する国際組織の発足に向けた機運が生まれ、1990 年の欧州ドラゴンボート連盟（EDBF）設立に続き、91 年 6 月に香港で 12 の国と地域が加盟する国際ドラゴンボート連盟（IDBF）が設立され、現在は世界 62 カ国が加盟。アジアではその翌年の 92 年にアジアドラゴンボート連盟（ADBF）が発足した。

国際大会としては欧州選手権をはじめ、世界 5 大陸の各ブロックで選手権大会が誕生。アジア地域では 1994 年に第 1 回「アジア選手権大会」が中国・広東省筆慶で開かれた。そして 1995 年 6 月、中国湖南省岳陽で 14 カ国が参加して第 1 回「世界選手権」が誕生。以後両選手権は隔年開催され、アジア選手権はことし 8 月にマレーシア・ペナンで第 8 回大会が、世界選手権は昨年オーストラリア・シドニーで開催された第 8 回大会に続き、来年 2009 年にポーランド・ポズナニで第 9 回大会が開かれる。また、国別対抗の世界選手権とは別にクラブチームが世界一を争う「世界クラブクルー選手権大会」も 1996 年のカナダ・バンクーバー大会から隔年開催されており、ことしは第 6 回大会がマレーシア・ペナンで、アジア選手権と同時開催される。

さらに近年、ドラゴンボートは総合国際競技会においても正式種目として採り入れられるようになった。2005 年にマカオで開催されたアジアオリンピック評議会（OCA）による「東アジア競技会」で正式種目に初採用され、日本から出場した大正大学カヌー部がみごと銅メダルを獲得。2010 年に中国・広州で開催される「アジア競技大会」でも正式種目として実施されることが決まっている。また、ことし 10 月にインドネシア・バリで開催される第 1 回「アジア・ビーチゲームズ」、2009 年に台湾で開かれる「ワールドゲームズ」においてもドラゴンボート競技が実施される。

日本のドラゴンボート

日本に龍舟が伝わったとされるのは 1655 年（明暦元年）。中国福建省の船が長崎に入ったものの、嵐で動くことができず、海神を鎮めるため手漕ぎ舟の競争をした。これが、全国的にも知られる長崎ペーロンのルーツといわれる。爬龍船レース、白龍レースとしていたのを発音がなまって“ペーロン”になったという。沖縄のハーリーも同じように中国から持ち込まれたが、兵庫県相生市の相生ペーロンは大正時代に長崎からきた造船所の工員らが、長崎みやげとして根づかせ、今では全市を上げてのイベントになっている。

現在のドラゴンボート

ペーロンをはじめとする日本の和船を用いた手漕ぎ舟による競漕は全国各地で行われているが、船首に龍頭、船尾に龍尾を飾り付けた中国伝統の龍舟を用いたのが、1988 年（昭和 63 年）に大阪・大川で生まれた日本国際龍舟選手権。艇は香港で造られたグラスファイバー製の 22 人乗りで、勇壮な太鼓の音と共に水しぶきをあげて走る様は、大阪の市民ばかりではなく多くの人が注目した。

琵琶湖のドラゴンカヌーや京都・久美浜のドラゴンボート、山梨・河口湖の大会などは、すべて大阪の大会をモデルにしてできた。また、東京でも 95 年に東京港の開港を記念する東京みなと祭の協賛事業として晴海ふ頭で「東京ドラゴンボート大会」が発足。2 回目から会場をお台場に移して以降は都民に親しまれ、昨年からは東京都の後援も得て東京みなと祭の主催行事となり、ことし第 14 回を迎えた。兵庫県相生市では 2002 年に、日本初開催となった第 5 回「アジア選手権」を誘致。前年の 2001 年にはプレ大会を実施した。以降は兵庫カップという名のもと伝統の相生ペーロン祭に次ぐ一大イベントとして地元に根づいている。

日本ドラゴンボート協会（JDBF）は 1992 年 7 月 23 日、桜内義雄氏（故人）を会長に「日本龍舟協会」として発足。現在は小野清子会長のもと、大阪、東京、滋賀、和歌山、静岡に府県協会をもつ、国内唯一の 22 人乗り艇ドラゴンボート競技を統括する団体として国際ドラゴンボート連盟（IDBF）に加盟。世界選手権、アジア選手権に出場する日本代表チームの選考を行っている。代表選考は 5 月の東京、7 月の相生、大阪での 3 大会を代表選考会とし、東京ドラゴンボート大会を第 1 次、相生ドラゴンボート選手権大会を第 2 次、日本ドラゴンボート選手権大会を最終選考会として実施している。

また、日本ドラゴンボート協会が主催、主管する大会は、関西地区を中心に増加しており、日本国際ドラゴンボート選手権を頂点とする、東京ドラゴンボート大会、相生ドラゴンボート選手権の公式戦のほか、和歌山市、大阪府吹田市で大会を開催。関西国際空港では毎年 8 月に 1 期島と 2 期島間の内水面をコースとする大会を開いており、今年で 5 回目を迎える。さらに今年は大阪府高石市、石川県七尾市のほか、福井県の九頭竜川でも新たに大会が行われる。

2008 日本国際ドラゴンボート選手権大会
競技概要

☆競技使用艇

艇本体の全長 12.4㍍

※舟の前部に龍頭、舟尾に龍尾を装備

☆使用艇数

10 艇

☆構成人数（1チーム）

25 名（漕手 20 名、太鼓手 1 名、舵取手 1 名、交替要員 3 名）

☆漕　　路

予選及び決勝、順位決定戦とも漕路 250㍍（予定）

☆種　　目

①オープン選手権 25 チーム　　②女子選手権 5 チーム

③男女混合選手権 35 チーム　　④シニア選手権 5 チーム

⑤ジュニア　　5 チーム

※男女混合は漕手が男女ともに 8 名以上出場しなければならない。

※シニアは漕手が 40 歳以上、女子は漕手が全員女子でなければならない。
また、シニアと女子の参加者は、自己責任の上で他のカテゴリーとの重複乗艇を可とする。

※ジュニアは 2008 年大会から新設。対象は中学生。

☆順位の確定

各種目とも予選・決勝を通じて着順によって決定する。タイム順による順位の決定は行わない。

☆参加資格

ジュニアを除く各選手権は、日本ドラゴンボート協会登録チームで満 15 歳以上（2008 年 1 月 1 日現在）の健康な男女。ただし、安全対策上競技ウエアを着けて 100㍍以上の泳力が必要。これに満たない場合、フローティングベスト（ライフジャケット）の着用を義務づける。中学生を対象とするジュニア部門は全選手にフローティングベストの着用を義務づける。

☆競技者基金の授与

各種目上位チームに対し、主管する日本ドラゴンボート協会の承認のもと、競技者基金（チーム育成基金）を授与する。